



2026 年
3 月 5 日 木
16:30 - 17:30

「女が〈書く〉のではなく 〈訳す〉とき： 天才の陰のルドミラ・サヴィツキー」

【演者】Julia A. Holter (ジュリア A. ホルター)

西部カトリック大学(フランス、アンジェ)講師、現代テキスト草稿研究所 (ITEM; パリ) 多言語主義・翻訳・創作研究グループ協力研究者。主な業績として「現代のキアロスクーロ: ピエール・ベルギヌー、ピエール・ミション、パトリック・モディアノ、パスカル・キニャール」(ブリル、2017年)など。その他、現代ロシアの詩人アンナ・グラソフとウラジミール・アリストフの翻訳(ジャン＝クロード・バンソンとの共訳)も手がける。現在はロシアの哲学者・言語学者であるグスタフ・シュベートの「美学断章」の翻訳に取り組んでいる。



参加方法

会場：成城大学3号館1階 312教室 事前予約不要。直接会場へお越しください。

* 参加無料(どなたでもご参加頂けます)

* 講演は英語で行われます (講演原稿の翻訳を配付予定・質疑応答は通訳あり)

講演要旨：

ルドミラ・サヴィツキー (1881-1957) は、ロシア系フランス人の作家・翻訳家、文芸批評家、ならびに演劇人であり、ロシア、英語圏、フランスという三つのモダニズムの潮流を媒介した存在である。しかし、その国際的意義はいまだ十分に評価されていない。幼少期にフランスへ移住し女優として活動を開始したが、夫によって舞台を禁じられたことを契機に、執筆へと活動の軸を移した。散文を伴う最初の詩集は「過度に美しい」と批判され、同時代の文学的ネットワークからも大きな支持を得ることはなかった。

多言語的感受性と複数の文学伝統に通じた深い素養を備えていたサヴィツキーは、ジェイムズ・ジョイス初期作品の翻訳者として最も適任な人物の一人であった。その才能は、エズラ・パウンド、ジョン・ロドカー、コンスタンチン・バリモントといった主要なモダニストたちにとって不可欠なものとなった。彼女のアーカイヴは、豊かな翻訳実践の痕跡とともに、作家としての野心が繰り返し奉仕の役割へと回収されてきた未完の可能性を浮かび上がらせている。

